

若い人たちへの期待

慶應義塾大学
阿川 尚之

2012年10月7日、横浜港大棧橋停泊中の護衛艦「ひゅうが」艦上で開かれた海洋安全保障シンポジウム第1部に、パネリストの一人として参加した。海上自衛隊、海上保安庁はじめ、海洋安全保障の錚々たる専門家の横で、私も一世紀半を超える日米海軍関係の歴史につき短い発表を行った。「そろそろ正式に海上自衛隊を海軍と呼ぶべきでは」「いざというとき海上自衛隊は本当に日本の海を護れるのか」など、核心に迫る問題提起もあり、こんなことが率直に話せるのも軍艦の上ならではだと感じた。

今回のシンポジウムには上智、東大、防大、慶應など、公募で選ばれた大学生が聴衆として多数参加した。パネリストの発表と議論が終わった後、学生諸君から質問を受ける。いくつも手が上がった。一部しか答えられなかったが、海自艦艇定員充足の問題について問うなど、ずいぶん勉強しているようすだった。時間の制約がなければもっと質問が寄せられただろう。彼らと一緒に甲板へ出て、議論を続けてもよかった。

大学の教員として平素学生に接しているのだから、彼らの意欲や興味のありなしは目でわかる。知的に刺激されると目が輝く、動く。本シンポジウムに参加した学生諸君の目がそうであった。また厳しい躰を受けている防大生だけでなく、一般学生も礼儀正しかった。すがすがしい。

振り返って私の学生時代には、多くの者が左翼イデオロギーにこり固まり、理屈も何もなく自衛隊に反発した。一方自衛隊に関心を寄せるのは軍艦や戦闘機のマニアか、かなり右の思想の人たちか。こちらも普通でないのが多かった。大多数の人は安全保障の問題にまったく無関心であった。自衛隊については語らない触れないほうが賢明であるような、そうした雰囲気は今でも戦後教育を受けた特定の世代の一部に残っている。

その時代と比べ、今の若い世代はずっと素直に自衛隊へ興味を示す。東日本大震災や尖閣問題などを通じ、国民にとって自衛隊は身近で尊敬される対象になった。特定の政策に賛成か反対かは別にして、若い人たちは安全保障

の問題を自分の頭で真剣に考えるようになった。安全保障の研究を本格的にやりたい、国防の第一線に立ちたいという優秀な若者が増えている。むろん無関心派もまだいるが、少なくとも彼らの大多数はおかしなイデオロギーで目を曇らせてはいない。

今回のシンポジウムには、防大の学生諸君のように国防の仕事をめざす者、安全保障に関係のない分野に進む者、その両方がいたはずだ。将来自分が身を置く分野や職業はともかく、この人たちには国民の一人としてこれからも安全保障について考え続けてほしい。シンポジウム参加がその1つの節目になったとしたら、よろこばしい。

「ひゅうが」は、シンポジウムの翌日から、観艦式の予行と本番に参加するために3度、朝横浜を出港し、夕方横浜へ帰港した。一般公開も数回行われたと聞く。かつて革新系の強かった横浜で、大栈橋に一週間護衛艦が停泊し出入港を繰り返すのは、これが初めてだろう。シンポジウムに参加した大学生諸君だけでなく、観艦式関連の行事に汗を流した海自の若い隊員諸君にも、これからの日本を支え守ってほしい。大いに期待している。